
帰宅不可症候群

天崎剣

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

帰宅不可症候群

【Nコード】

N5205C

【作者名】

天崎剣

【あらすじ】

帰りたくても帰られない。木下は悪夢に苛まれていた。会社から、どうしても家に戻れないのだ。帰宅した記憶が全くない、にもかかわらず、愛妻弁当はいつものようにぎっしりと詰まって、彼の手に握られている。

じりじりと夏の日差しが照りつける。アスファルトに溜まった熱は上昇し、ビルの照り返しと混ざって、更に街を燃え上がらせる。嫌な季節だ。誰もがそう思う。

こんな季節でも、スーツをピシッと着込んで営業に出かけるのはサラリーマンの宿命とも言うべきか。世の中クールビズだの何だの騒いでいても、所詮ビジネスマンというやつは、スーツという鎧に身を固め、営業という名の戦地へ赴くのだ。紳士服屋で新調した最新の軽量型清涼スーツがなければ、今年はとてもじゃないが外回りなんてやっていられなかつただろう。清涼、というのはもしかしたら気休めかも知れない。都会の空気は澱み熱され漂っていた。スーツを通してじつとりと湿った妖怪が張り付き、午後の営業を終える頃には背中じゅうがべっとり汗まみれになる。

木下はハンカチを取り出し、汗を必死に拭った。三十代半ばの男の汗はべたべたと粘着質で、拭っても拭ってもさっぱりしない。それでも滴り落ちる汗を何とか拭き取る。

(今日も何とか終わった)

ふうと溜め息を吐いた木下の後ろから、部下の田中が言った。

「木下係長、もう社に戻るだけなんですから、いい加減上着脱いだらどうですか。熱射病になりますよ」

社屋までの帰り道、歩道橋の上までやっと昇りきったところ。日が傾きかけて、蜜柑色のヴェールが一時おきひかりに街に被さっていく。眼下の片側二斜線道路には、ぎゅちりとおしくら饅頭するかのように車がひしめき、帰宅ラッシュが始まっていることを知らせてくれる。視界一杯に広がるビルの群れは砂漠の起伏のようにどこまでも続く。木下は一瞬、意識をサハラへと飛ばしてしまったかのような錯覚に囚われてしまう。

歩きすぎてふくらはぎが痺れた。木下は鞭打つように自分のふく

らはぎをパンパンと叩き、気合を入れた。

「『会社に戻るまでが営業』、そういう真摯な態度で行かないと。いつどの会社の誰がどこで俺達を見ているか、わからないんだからな」

木下は自分に言い聞かせるように言う。

振り返ると田中は、歩道橋の橋げたの半ばで力尽き、黒い営業靴を足元に置いてぐんと背伸びをしていた。あーあと気持ちのよさそうなふぬけた声を出し、涙を浮かべてコリコリと肩を鳴らしている。「係長、真面目すぎですつて。どこかで気を抜かないと、今に大変なことになりますよ」

入社二年目の田中は、まだ学生気分が抜けないのか、軽々しい喋りをする。木下は、自分も十数年前は同じような　どこかゆるい生き方をしていたものだと思いつく。だが、それはそれ。今、多少なりとも責任のある立場になったからには、そんな気持ちでは到底仕事に向かえないことを知っている。

元来生真面目な木下は、手を抜くことが大嫌いだ。曲がったことも、勿論嫌だ。どんなに苦しくても、彼は自分がこうと決めた道は突き進むし、頼まれた仕事は責任を持って最後までやり遂げないと気が済まない。どこか、潔癖症染みたところがあつた。

長所と言えば長所なのだろうが、短所と言えば著しく短所であるこの性格は、結婚しても直らなかつた。

三年前に彼は会社の同僚、愛子と結婚した。彼女は仕事を続けたいと言つたが、その意思を無視して無理矢理退職させた有様。木下の中では、妻は家を守るものと言つ意識……固定観念がなかなか消えなかつた。

幼い頃両親が離婚した木下は、家族と言う存在に一種の憧れを抱いていた。家に戻つても誰もいない、幼少時代。寂しさや心細さに打ちひしがれた日々。木下少年が当たり前の家族を夢見ることは許されなかつた。女手一つで育ててくれた母に対して申し訳なく心の内でいつか自分が理想の家族を作り上げるのだと誓うばかり。

心労が祟り、五年前に母親が他界した後も、その思いは潰えず、妻に押し付けるように、専業主婦の道を強要した。妻の愛子はそんな彼の寂しさを察してか、始めこそ不服に思っていたようだが、文句も言わず、尽くしてくれる。そればかりではない。

木下の家族観は徹底していた。

専業主婦であるからとスーパーやデパートの惣菜は一切禁止。手作り料理こそ最もよいものと、常に口を挟む。それこそが、彼の過去になかった、彼が最も欲していた、家族の温もりの形なのだ。更に、先月産まれた長男勇人の育児についても異常にこだわった。母乳育児、布オムツ、手縫いの肌着……。どんどん要求はエスカレートしていく。それでも妻は、夫が決めたことだからと誠実に言いつけを守った。

型にはまったような木下の生き方は、団塊世代の頑固オヤジのようだと皆陰口を叩いた。木下はそれを知っていて、それでも、どうにもこうにもこの生き方を変えることが出来なっていた。四十前なのに年寄り臭いとよく言われる。だからどうだと木下は言う。彼は自分の生き方を曲げようというつもりは一切ない。人は人、自分は自分。そう信じていたからだ。

だからだと流れる汗が頬を伝い、顎に差し掛かり、慌てて拭う。

歩道橋から、株式会社ヤマカワの看板が見えた。六階建てのビル、木下の勤め先だ。

（さあ、戻ったら、今日の商談の内容を整理して、課長に連絡。それから明日の資料を準備して……。まだまだ仕事はたんまりある）木下はよいしょと重い鞆を持ち上げ、歩道の先にある自社ビルへと向かっていった。

2・月曜・夜／火曜・朝

五階の営業一課。

午後七時を少し回った頃、仕事が一段落した木下は、やっと帰る準備を始めた。

田中は、

「係長、無理しないで下さいね。偶には可愛い奥さんと子供のために早く帰ったらどうですか？」

などと彼を気遣い、定時でそそくさと帰っていった。

木下はひとり、営業一課の事務室を後にし、エレベーターへ向かう。

家に仕事は持ち込まない主義、木下の手荷物はいつも、愛妻弁当だけ。空の弁当箱をフラフラと揺らしながら、彼はくたびれた白い壁に囲まれた廊下をずんずんと歩いていく。経費節減で廊下の明かりは御法度。あちこちの事務室から漏れる光を辿りながら進んでいく。じわりじわりと一日かけて熱せられた廊下の空気に、事務室のドアの隙間から這い出してくる冷気が混じった。時折ひんやりと木下の靴下を撫ぜ、足を撫ぜ、消えていく。

夜の会社は得てして不気味なものだ。光の加減だけで、全く別の生き物へと変貌してしまう。妖怪の腹の中にもぐりこんでしまったかのように、じつとりして、生臭く、どことなく冷え冷えする。こんなじめじめと暑い日には、何か起こりそうだと、木下は珍しくそんなことを考えた。田中の、「どこかで気を抜かないと、今に大変なことになりますよ」と言う台詞がなぜか心の中にしっかりと浮かび上がり、消えなかった。

(暑い、早く家に帰って飯に風呂に、ビール)

田中の残像を振り切ろうと、木下は何度も何度も呪文のようにそっとう呟いた。

歩いていく、歩いていく。

エレベーターホールで止まる。下矢印ボタン、乗り込み、一階ボタンを押す。

(飯、風呂、ビール)

木下ひとりだけが四角い箱の中。瞳を閉じ、大きく息を吸い込む。帰りの一人っきりのエレベーターは、木下の僅わずかなりラックスタイル。

と、どつと眠気が襲う。体が重くなり、ふらふらつと、足がもつれる。

(昼間の暑さが今堪えたか)

木下は寄りかかったエレベーターの壁を突き放し、ぶんぶんと頭を振った。

(疲れたなんて言っていていられるか。明日はまた重要な取引があるんだ)

右手に持った空の愛妻弁当をダンベル代わりに、ぐいと持ち上げる。肩をすばめたり広げたり、気合を入れる。

(とにかく、早く帰って飯に風呂にビール……)

チンッ

一階。

エレベーターのドアが開く……。

「おはようございます」

ドタドタドタ……。

たくさんの足音がまず、木下の耳に入った。

ざわざわと賑わう、エレベーターホール。自動販売機と、大きな窓。遠くにオフィス街が見下ろせる。

明るい日差しが、爽やかにホールを包み込んでいる。

さっぱり顔の社員達がぞろぞろと階段やエレベーターから現れ、ホールを抜けて事務室へと向かっていく。

「係長、おはようございます。今日の商談もうまくいくといいです

ね

右後方から話しかけてきたのは、田中だ。

木下は目をまあるくして、田中を凝視した。

「僕の顔に何かついてますか？ 髭剃ったし……、ちゃんと顔も洗ってきましたよ？ 大事な商談ですから、気が抜けませんもんね」

「そ、そうだな……」

話をあわせてみたものの、木下は狐につままれた気分を拭えなかった。

（あれ？ 俺は今、家に帰ろうと……）

何かがおかしい。

ついさっきまで、外は真っ暗で、自分は家に帰ろうとしていたはずだ、と、木下は首を傾げた。周りはどう見ても、朝の光景。一階に向かったはずが、気付けば元通り、営業一課の事務室のある五階にいたのではないか。ホールの隅に置かれたテレビから、間違いないように流れているのは朝のニュース。一晚経っているのに違いはないようだ。

不思議に思いながら、右手を見ると、木下の妻が作った愛妻弁当。いつもどおり、ぎっしり詰まっつてずっしり重い。

（さっきまで、空っぽだったような……）

しかし、腕に感じるのは、朝の弁当の重さ。

よくよく見てみれば、スーツもしっかり着替えてある。きちんとシワの伸びたワイシャツ、折り目も毎朝の如くピンと張っているスラックス。

どう考えても、一度家に帰ったに違いないようだが、木下には全く覚えがない。

（そういえば、疲労感も少ないし、腹も減ってない。疲れてるのか？ 駄目だな……こんなことでは）

木下は勝手に結論付けた。きつと、疲れすぎていて錯覚しているのだと。

気のせいだ、気のせいだ、と繰り返し、木下は自販機に向かう。

帰宅不可症候群

朝の目覚まし用珈琲を購入し、ぐいぐいとひと飲み。飲み干した缶を暫く無言で見つめ、くずかごへ捨てる時、首を捻りながらも事務室へ歩いていった。

3・火曜・夕方→水曜・昼

商談が成功し、木下と田中は夕方悠々と社に戻ってきた。

「流石係長、尊敬しますよ」

プレゼンがうまくいき、思ったよりも好条件で取引が成立したことを、二人は喜んだ。

「お前のサポートのお陰だ。今夜一杯、飲みに行こうか」

木下は気前よく田中を誘う。

「ありがとうございます。助かりますよ、給料日前なんでー」

田中のニコニコ顔と一緒に、木下は事務室を出てエレベーターホールへと向かった。右手に空の弁当箱を引っ提げて。

薄暗くなった社の廊下を雑談しながら歩く木下の脳裏に、ふと、今朝のことが思い出される。

（あれは、何だったんだろうな。何かがおかしかったような気がしたんだが……）

それでも、きつと疲れのせいだから飲みに行けば吹っ切れるだろうと、木下はそのことを口に出さず、いつものようにエレベーターに乗り込んだ。田中が隣で、今日の商談の内容を振り返って、べらべらと喋り捲まくっているが、木下の耳には殆ど聞こえない。

（三階……二階……一階……。ほら、いつもと同じだ。何も、気にすることなどないさ……）

すつと、浮き上がるような独特の感覚の後、いつもの音。

チンッ

ザワザワザワと、群集の気配。

顔を上げると、五階のエレベーターホール。

「あれ？」

木下は思わず声を上げた。

辺りを見回せば、明るい日差しに、朝のニュース。それから、事務室へ向かう人の波。

「おはようございます、木下係長。昨日はご馳走様でした。助かりましたよ」

田中だ。

木下は慌てて、田中を人の群れから、自販機側の空間へ引きずり出した。無理矢理腕を掴まれ、急に荒っぽく扱われた田中は、それこそ目を丸くして、木下を見ている。

「係長、どうしたんですか？ おかしいですよ？」

田中の言うとおり、木下は興奮していた。ここ数日、疑問に思っていた、そのことがどんどん真実味を帯びてきたからだ。

「田中、昨日、俺はお前と本当に飲みに行ったのか？」

突飛な質問に、田中は目を見張り、眉をへの字にして、

「何言ってるんですか。行きましたよ！ 明日に持ち越すと大変だから、この辺でやめましょうって俺が言うまでずっと飲んでましたよ。帰ったのは日付け変わってからで、マンションまで送ってたら、奥さん酷く怒ってましたよ。大変だったんですから。やだなあ、係長らしくないですよ、記憶がなくなるまで飲むなんて！」

（昨日……そんなに飲んだのか？ 言われてみれば頭がガンガンする。少しぼーっとするのも、そのせいか。飲みすぎて記憶がなくなつた……？ 普段そんなに深酒なんてしないんだが……）

顎を触りながら、しきりに記憶を辿る木下の姿を、田中は不審に思った。懐から胃腸薬を取り出し、木下に差し出す。

「係長、二日酔いは不味いですよ。シャッキリしないと……って、俺の言う台詞じゃないですよね。それじゃ、先行ってますから」

「あ……ああ。ありがとう」

渡された胃腸薬の箱を左手に持ち、カサカサと振る。

（午前様なんて、したことはないんだが……）

田中の言う、昨夜の自分の行動に、納得できないでいた。

（何かがおかしい。でも、それが何なのか、俺にはわからない……）

目の前の自販機から、いつもの珈琲を買う。もたれた胃に珈琲の苦さが染み込む。缶を捨て、人の群れに混じって事務室へ向かう木下の右手には、朝、間違はなく自宅から出勤したことを示す、愛妻弁当の重みがずっしりと感じられていた。

昼休み、どうしても気になって、木下は自宅に電話をかけた。

昨日の記憶、断片すら思い出せないことに、胸騒ぎがしていた。

「もしもし、俺だけど……」

屋上で誰にも聞かれないように、こつそりと電話する。

夏の日差しはじりじりと今日も容赦なく照り付けていて、貯水塔の日陰にいても汗が大量に噴き出るほどだった。

『どうしたの、何か用？』

妻の愛子の声だ。そっけない上に、怒っているようだ。

遠くで息子の泣き声がある。

『ちよつと今、ご機嫌が悪くて……。あまり待たせるとかわいそうだから、手短かにして欲しいんだけど』

離乳食に切り替わったばかりの息子は、よくご飯時にごねて時間がかかるのだと愛子に聞かされていたことを、今になって木下は思い出した。

「あ、ああ。済まない。昨日のことなんだけど、悪かったな。随分遅くまで飲んでしまったみたいで」

木下は田中に言われたとおりのことを、愛子に話した。

『別に、私はそのことに怒っていたんじゃないわ。前々からの鬱憤が溜まっていたのよ。渡した書類にキツチリ判子押してね。今、家事の合間を縫って荷物を纏めているの。週末には出て行くつもりだから』

「出て行く?! どういうことだ!」

ざあっと、血の気が引く音がする。木下の携帯電話を持つ右手が、膝が、ブルブルと震えだす。

『どついつことして、あなたが言ったんじゃない！ 俺の言うとおりに出来ないなら出て行けって。そう言っただけで私を殴ったくせに！ だから出て行くのよ。もう、雁字搦めがんじがらの生活は懲り懲りなの。勇人は連れて行くから。そのつもりでね。そうそう、書類、忘れられても困るから、ジャケットの内ポケットの中に差し込んで置いたわ。私の判は押印済みよ。あなたの欄記入してね』

「ちょ……ちょっと待て、俺はそんなこと、言った覚え」

ツー、ツー

愛子が電話を切った。

木下の手から携帯電話が滑り落ちて、屋上のコンクリの上に転がった。

無常に、回線の切れた音が漏れた。

(何が起きているんだ、俺は、何をしたんだ……?)

木下はがっくりと肩を落とし、取水塔にもたれかかったまま、ずるずると座り込んだ。放心状態で空を見上げれば、雲ひとつない、青空。

生ぬるい風が吹く。

木下は無心に、愛子の作った弁当を頬張った。いつもと変わらぬ味。数日前までいってらっしゃいとにこやかに送り出してくれていた愛子の笑顔と、あどけない息子の顔が、木下の身体一杯に広がっていった。

4・水曜・夕方→木曜・昼

愛子の言葉どおり、ジャケットの内ポケットから区役所の封筒に入った書類が出てきた。

薄い白い紙に、緑色の印刷　左上部に「離婚届」の文字。

突きつけられた現実、だが、実感が湧かない。

（もういちど、何が起きているのか、整理してみよう。俺の周りで、ここ数日起こった出来事を）

残業で一人残った事務室、机に裏の白いコピー用紙を数枚広げ、木下はボールペンで箇条書きにこれまでのことを綴り始めた。

夕焼けがオフィス街のビルに当たり、乱反射して色を強め、強いオレンジ色になって営業一課の事務室を包んでいた。長く伸びた木下の影が、哀愁を漂わせて床に伸びる。冷房を切った室内、全開した窓から生ぬるい風がどつと吹き寄せると、重石の乗った書類の束がカサカサと侘^{わび}しく音を立てる。

（まず、最初に異変があった、あの日　月曜日だ。俺は間違いなく、エレベーターで一階まで下りたんだ）

カリカリとボールペンの走る音が室内に響く。

（気がつくと、朝になっていた。俺は五階のエレベーターホールにいた）

（その夜、田中と飲みに行くはずだった。でも、俺は行ってない。なのに、二日酔いしていた）

（朝帰りして、愛子が怒っていたらしい。でも、俺は知らない）

（昼に電話したら、いきなり離婚の話になった。でも、理由がわからない）

そこまで書くと、木下はボールペンから手を離れた。コロコロコロと、ペンは机の端まで転がり……、落ちた。

両手で頭を抱え、もしかもしかと整った髪の毛を掻き毟る。木下の中で、嫌な予感、得体の知れないものに突き当たってしまった

恐怖へと変わりつつあった。ぞわっと、悪寒が走り、足が地面から浮くような感覚。全身から汗が噴出し、喉が枯れた。見開いた目にメモの字が襲い掛かってくる。

（俺じゃない。誰かが、俺の知らないうちに、俺の振りをして生活してるのか？）

そう、思わずにはいられなかった。だが、

（それじゃ、どうして俺は今朝、二日酔いを？ やっぱり、ただ、酔っ払っていただけなのか？）

ぐるぐると思考が巡る。

木下は震え上がった。今日もまた、帰られないのではないか、エレベーターに乗れば、やはり次の日の朝になっていて、それまでのことを覚えていないのではないか。

（何てことだ……！）

ぐしゃぐしゃぐしゃと、もう一度頭を掻き毟る。すると、木下に一つの考えが浮かんだ。

（そうだ、エレベーターなんかで下りるからいけないんだ。階段だ、階段を使えばいいじゃないか。そうしたら、あんなことにはならないはずだ……！）

思い立ったら、やらすにはいられない。

木下は机のメモを引き出しにしまい、鍵をかけ、机の上をまっさらにする、空の弁当箱を持って廊下へ飛び出した。

エレベーター脇の階段を一気に下る。だっだっだっだと、勢いよく、リズムをつけて、下る、下る。

（大丈夫、階段なら、行ける、帰られる）

木下は期待に胸弾ませてどんどん下りた。帰りたい、ただ一心で。

三階……二階……一階……。

（ほら、あとは正面玄関へ）

「あれ、係長、今日は階段使ったんですか？」

はあはあと息を吐く間もなく、田中の声に顔を上げた。

白く優しい日差し。朝のニュース、事務室へ向かう人の波。

木下は、がっくりと膝を落とした。

(また……まただ。帰られなかった)

右手に持っている弁当箱、ひよいと上げると、重かった。

(でも、俺はやっぱり、家に帰っていたのか？)

「駄目ですよ、階段で来たくらいで息切らしてちゃ。営業は足が勝負、そう言ってたじゃないですか」

にこやかに「それじゃお先に」と事務室へ去っていく田中の背中。木下は壁を頼ってやっと立ち上がり、いつものように自販機に向かう。珈琲をひとつ。ぐいぐいと飲む。

(俺の、貴重な時間は、一体、どこに消えてしまったんだ。どうしてこんなことに……?)

カランカラン、くずかごに缶を捨てる。

着替えたスーツ、キツチリ剃つてある髭、セットした髪、愛妻弁当。どれも、家に帰らないと手に入らないものばかり。木下に記憶がなくても、間違いなく、木下の身体は、帰宅しているのだ。

昼休みに、屋上で愛子に電話する。

腑に落ちないことだらけで、そして、自分が原因でなぜか離婚することになってしまったことが不可解で、仕事どころではなかったのだ。

電話口の愛子はぶっきらぼうにこう言った。

『今の時間は忙しいって、言ったじゃない。私だって、初めての育児で大変なのよ。わかっていて電話するの?』

やはり、息子の勇人は泣いているようだ。しかし、木下だって差し迫っていた。

「悪いと思ってる。だけど、ちゃんと話しておきたくて」

『話は、昨日帰ったときにしました。夜中まで長々と。あなただって、離婚届にしっかり署名捺印してよこしたじゃない。私、親に証

人欄書いてもらって、今日区役所に出しに行くつもりだから』

「え、なんだって?!」

寝耳に水もいいところ。なんと、自分が署名に捺印までしていたという。もちろん、木下にその記憶はない。

懐を弄まさぐれば、確かに昨日は内ポケットにあっただはずの封筒がない。

「ちよつと、ちよつと待って。役所に行く前に、もう一度、書類を見せてくれ。頼む」

覚えがないのに、離婚されては一溜まりもない。木下は必死に頼み込んだ。愛子は仕方なく、明日の朝、木下の上着の内ポケットに書類を入れておくことを了承する。代わりに、木下自身がその届けを区役所に持っていくという条件付で。

次の日の朝、やはり木下は夜をすっ飛ばして、五階のエレベーターホールへと舞い戻っていた。

キラキラと眩しい朝日は、そんな彼を皮肉って笑っているようだ。出勤する社員、朝のニュース、いつもの光景。

今日は金曜日、家に帰れぬまま、週末を迎えてしまった。

こう何日も続くと、だんだん、諦めに変わってくる。もしかしたら、自分はこのまま、会社から帰ることなど出来ないのではないかと、嫌になるほど思い知らされたからだ。

木下の手には、今日もぎっしり詰まった弁当が引っ提げられていた。どうやら、こんな状況になっても、愛子はいつもと変わらず、弁当を寄越したらしい。まだ、自分に対する愛が残っているのではないのかと、期待してしまふ。彼女を離婚まで追い込んでしまったのは、どうやら自分らしいのだが……。

いつもの缶珈琲を買い、いつものように飲み干す。缶を捨てた後、そつと内ポケットに触れると、何かがある。紙、封筒だ。

(離婚届……?)

なんとしてでも確認せねば。だが、迂闊に見れば、社内中に噂が広まってしまふ。

木下は弁当を握り締めたまま、一目散に屋上へ駆け上った。

朝の屋上は、涼やかな風が吹き、昼間と違って空気もよかった。

既に太陽は高かったが、雲に遮られてか、まだ熱いとは感じない。眼下に広がるビル群は、朝日を受けて、昼間とはまた違ったコントラストを浮かび上がらせている。

取水塔の真下で、木下はしゃがみ込み、弁当を傍らに置くと、そそくさと内ポケットから封筒を出した。

区役所の茶封筒に入ったそれは、先日確認したのと同じ、白地に緑色の印刷で、確かに「離婚届」とある。更にその詳細を確認

名前、住所、本籍地、子の名前、書名欄……。読み進めていくうちに、体中の血がどんどん逆流していった。激しい動悸に襲われ、涼しい風が吹いているはずなのに、だらだらと汗が滴り落ちた。何故だか、紙を持つ手が自然と震え、証人欄を確認しようと更に用紙を広げるときに、グシャッとシワをつけてしまう。

「俺の……俺の字だ……。間違いない。俺が、書いている。俺の知らないうちに、俺が書いて、俺の実印を押している……。嘘だ……。嘘だ……」

額から湯気が出ているようだ。木下は、興奮して真っ赤な茹蛸ゆでたいになつていた。息が荒く、血管が浮かび上がる。

ぐしゃんと、両手で届出用紙を挟み込んだ。合掌する形で、暫く目を閉じ、眉間にシワを寄せながらも自我を保とうと必死に息を整える。ふうー、ふうー、ふうー、数回深く息をして、ゆっくりと目を開ける。

「これから仕事だ……。落ち着け、落ち着くんだ……」

木下は、手元の白い紙を、折り目どおりにしっかりと折り直し、封筒に入れて懐にしまった。

まだ、胸は高鳴ったまま。

彼は出来るだけ平静を保ちながら、営業一課へと向かった。事務机に辿り着く頃には、顔の赤みも落ち着き、いつもの木下へと戻っていた。机の上に書類を並べ、今日の営業の準備をする。朝礼、ミーティング。彼は何事もなかったかのように仕事を続ける。

それでも、見ている人はきちんと見ているものだ。

「木下係長、ちょっと、いいか……?」

一課の課長、島田が、木下に声をかけた。丁度、田中と一緒に外回りに行こうと営業鞆を持ち上げた時だ。

木下はそのまま鞆を机の下に置き、島田に呼ばれるままに、一課の応接間へと通された。

一瞬事務室内が騒然とするが、木下の耳にそんな様子は届かない。六畳ほどの室内に応接セット。島田に促され、木下はソファうなに

腰掛けた。

「何か、あつたのかね」

島田は太い声で、彼に尋ねた。

「あ、いや、大したことでは……」

木下は恐縮した。

島田は、木下夫妻の仲人でもあつた。愛子が社にいるときから、色々お世話になってきた。彼の前では、木下は気の小さい、新入社員のようになってしまう。どうにも頭の上がない相手。

「近頃、仕事に身が入っていないようだ。同行の田中も、お前のとを気にかけていたぞ、何かあるみたいだつてな」

恰幅のよい島田は、バーコードになりかけた頭をぐいと正面の木下に寄せて、

「なに、遠慮することはない。お前が何かを思いつめているのはすぐわかる。隠しているつもりだろうが、バレバレだ」

大きな顔一杯ににんまりと笑つて見せる。

島田の笑顔に負けて、木下は強張っていた肩を少し、ほぐした。

「実は……」

木下は震える右手で、懐から封筒を取り出し、目の前に座る島田に差し出す。

「愛子から、渡されまして……」

弱々しく出された封筒をさつと取り、島田は中身を改めた。白地に緑色の印刷、「離婚届」の文字を見ると、彼は目を大きく見開いた。

木下は溜めていた思いを晴らすかのように、顔中に涙を浮かべて、テーブルに手と額を付いた。

「仲を取り持つてくださった課長には、お詫びのしようもございません……！ しかも、家庭の事情で、仕事にも支障をきたすなど、もつてのほか」

「よしよし、話はわかった。頭を、頭を上げなさい」

ぼんぼんと、島田に肩を叩かれ、木下はゆっくりと頭を上げた。

「原因は、何だね。去年、息子が生まれたばかりじゃないか。これからという時に、愛子君がこんなものを寄越すとは、余程の事情だろう?」

震える木下に、島田はあくまでも優しく問いかける。

「それが……、私にも、わからないんです」

木下はそういうのが精一杯だった。

「わからないって、そりゃ君、おかしいよ。わからないのに離婚届なんて。第一、君のサインもある。わからないじゃ済まされないだろう」

「ところが、わからないんですよ。本当に、わからないんです。いきなり愛子が、こんなものを。それに、私の字で確かに書いてあるけれども、これは私が書いたんじゃないやありません。覚えがないんです。今週は、ずっと、家にだつて帰ってないのに……」

島田はとうとうムツとし出した。木下の言っていることは、どうも辻褄つじつまが合わないのだ。

「木下君、私はね、君の真つ直ぐなところが好きだ。自分の主張は曲げない、責任感もある。だが、今の君の発言はいただけのないな。矛盾だらけだ。君の字なのに、君が書いてないとは一体、どういうことだね。家に帰ってない? そんなはずはない。君が毎日持つてくるのは、愛子君の愛妻弁当じゃないのかい? 家に帰らず、どうやって弁当を持つてくるんだね?」

勢いに押され、木下は肩を竦すくめて身を引いた。

島田が怒るのは当たり前だ。自分だつて理解できていないのに、木下はその状況を暴露してしまったんだから。

「か、課長、私は嘘なんかついていません。本当なんですよ。嘘じゃない。毎日、帰ろうしても、帰られないんです。家に帰って、離婚届にサインしたのは、私じゃない。私かもしれないけど、違うんです」

木下は、おどおどしながらも、必死に訴えた。課長に信じてもらえなければ、後は誰を頼ればいいんだ、という思いがあった。何と

かして、自分の今おかれている状況を理解してくれる人が欲しい、その一心で、島田に訴えかけた。

だが、島田は、そんな木下の気持ちを知らず、すつくと立ち上がり、こつ漏らす。

「木下君、今日はもういい。君に必要なのは、私じゃない。精神科の医師だよ」

島田の言葉は、木下を打ちのめした。

真つ暗な闇の中に放り投げられ、前後不覚のまま、ぐるぐると旋回していく。身体が硬直し、カタカタと壊れたロボットのように震えだした。涙が止め処なく流れ、汗と混じり、鼻水と混じり、顔中を濡らす。

（精神科……、違う、俺は、間違ったことなど、喋ってないのに……）

6・週末

そこから先は、木下の記憶が曖昧で、鮮明に語ることが出来ない。金曜の午前十時過ぎ、木下は早退し、自宅へ向かったと思われる。土曜日、日曜日と、愛子の通告した家出騒ぎが、実際に行われたらしい。愛子の実家から両親が訪れ、荷物と共に妻と息子を連れ、いなくなった。結婚と同時に買ったマンションの中に、ぼつんとひとり、膝を抱えて座っている、そんな画像が木下の脳裏に、途切れ途切りに浮かんでいた。

「私は、あなたのことを好きだけれど、あなたとずっといることは、私と息子を不幸にする」

愛子の言葉が、木下の耳に残る。

泣きじゃくる勇人の声が、妻と息子を呼び止める木下自身の声が、暗闇の中でこだましていた。

何も無い、空っぽの空間に、漂い、沈んでいく。

夏の暑さが見せている、幻影なのだと、木下は自分に言い聞かせた。

（全ては夢、夏の夢だ。俺は家に帰られなくなったはず。愛子にあんなものを突きつけられたから、こんなに怖い夢を見たんだ。いや、もしかしたら、あの離婚届も、夢だったに違いない。夢だ、夢に決まってる。だから、目が覚めたら、元通り、いつもの生活に戻っているはずなんだ）

月曜日の朝、田中が営業一課に出勤すると、課長の島田が不機嫌そうな顔で事務室内をうろろろしていた。木下の机に人だかりが出来ている。なにやら言い合っている。

「どうかしたんですか？」

気の抜けたような声であたりに尋ねると、同僚の女性が答えた。

「木下係長と、連絡が取れないらしいよ。携帯電話も、家の電話も不通らしくて。どうしたのかなあ」

いつもキツチリ、時間前に到着しているはずの木下が、役職者のミーティングに顔を出さないのは、明らかに不可解だった。島田が朝から数度電話したが、留守で連絡の取りようがないという。無断欠勤するような人間じゃない、だからこそ、彼のことが皆気がかりだった。

田中は、暫く黙りこくっていたが、何かを思い出したように、島田のもとへ駆け寄った。

「課長、課長、ちよつと、いいですか？」

人ごみを掻き分け、島田のスーツの袖を引つ張って、応接間へ引き込み、内鍵を閉める。「田中、どうしたんだ？」との声に耳を貸さず、彼は自分の中に燻^{くすぶ}っていたものを島田にぶつけた。

「先週もチラツと話しましたが、係長の様子、おかしかつたんです。多分、連絡取れないのはそれが原因ですよ！」

「田中、お前もそう思うか！」

真剣に訴える彼の目に、島田は動揺した。木下の態度の不自然さを気にかけていたのは、自分だけではなかった。田中までも、自分と同じ考えだったとは。彼の不安が確証に変わった。

「課長も、そう思ってたんですね」

極力声が漏れないように、田中はボソツと、島田に囁^{ささ}いた。

島田は慌てて、田中をぐいぐいと応接間の奥へと引き寄せ、

「ぐ……具体的に、どうおかしいと思った？ 言ってみる」

「は、はい。それはですね……」

田中は先週の木下の様子、とりわけ朝のエレベーターホールでのことを細かく説明した。ホールで出会うたびに、必要以上に驚いていたこと、前日飲みに行ったことを忘れていたこと、階段をわざわざ使用していたり、弁当を不思議そうに何度も見ていたりしたことを……。

「田中、実はな、木下は俺に、『家に帰ってない、帰られない』と

言ったんだ。彼の字でサインした書類を見て、『書いてない』だの、『自分かもしれないが、違う』だの……」

二人は、木下の行動を、ひとつずつ、思い出そうとした。何かあったのか、すこしずつ、突き詰めなければ、一向に結論に辿り着かない、そんな予感すらした。『帰られない』と、島田に話した、あの言葉は、どこまで本当だったのか。毎朝の、奇妙な行動は何だったのか。田中と島田は、答えの出ない謎にぶち当たっていた。

突然、エレベーターホールから、女性の悲鳴。

二人は顔を見合わせると、現場へと急いだ。タイミングのいい悲鳴に、彼らの心臓は激しく鼓動していた。

「木下係長が……、係長が……」

悲鳴に駆けつけた島田と田中は、彼女が震えながら指差す先、ホールの角に置かれた小さなテレビへと視線を注いだ。ニュース画面が、見覚えのあるマンションを上空から映し出している。

「マンション駐車場で見発見された遺体は、ここに住む会社員、木下充さんとみて調べを進めています。近所の人の話では、ここ数日、家族と激しく口論……」

青いビニールシート、駐車場に張り巡らせられた、KEEP OUTの黄色テープ。

「……落下したと見え、自宅から遺書など見付かっていないことなどから、自殺・他殺の両面から捜査を……」

淡々と事実を語る、アナウンサーの声。

島田と田中は、画面に釘付けになった。

ばたばたと、人がホールになだれ込んでくる。そして皆、島田たちと同じように、事態に困惑し、呆然と立ち尽くした。

「木下……、お前に何があったんだ……？ 何がそこまでお前を、追い詰めたんだ……？」

島田の声だけが、空しく、ホールに響いた。

最終的に自殺と断定された、木下の葬儀は、滞りなく終わった。
木下が役場に離婚届を提出していなかったことから、喪主は妻の
愛子が勤めた。

あまりに突如な出来事に、皆胸を痛め、号泣していた。

島田は騒ぎの間ずっと、全身にざわざわと走る悪寒と、痙攣にも
似たような震えに襲われていた。週末に、「お前に必要なのは精神
科だ」などと無責任に言い放ってしまった自分を、責め立てていた
のだ。自分の立場ではあの言葉しか浮かばなかったと、正当化する
反面、確実にその言葉が木下を追い詰めたのだとさえ思った。だが、
どんなに思いを巡らせても、木下が死んだ事実は変わらない。それ
が一層、島田を後悔の念に駆り立てた。

葬儀から一週間ほど経ち、木下の机を整理しなければならなくな
ったその日。

営業一課の事務室の隅、島田は田中と二人で、木下の机を漁った。
全ての引き出しから物を撤去し、綺麗に拭き上げねばならなかった。
彼の几帳面さが覗える、きちんと整理整頓された引き出しの中身を、
分類して数個のダンボールに詰めていく。どの文書にも、彼の綺麗
な字でびっしりとメモが書きこまれていて、生前の仕事熱心な姿が
目に浮かぶ。

鍵のかかった机の引き出しを、最後に片付ける。遺品から見付か
った鍵で開けると、一枚の妙な紙が出てきた。白いA6版のコピー
紙、木下の性格を思わせる、裏面再利用のメモ紙。

二人は、そのメモの内容に、目を見張った。

全体にぎつしりと細かく並ぶ、神経質な字。

『気がつく朝』

『田中と飲んだ？』

『エレベーター……× 階段……？』

『離婚届』

様々な言葉。

木下があ的事件の前後に記したことは明白だった。

「やっぱり、あの辺から係長に何かが起こっていたんですね」

田中の一言に、島田が相槌あいづちを打つ。細かい字を、一文一文、島田は上から指で辿たどっていく。

『サイン？俺？』

これは、離婚届のことだ。

『弁当 家から出勤、間違いない』

『離婚の理由……？』

だんだん、字が乱れてくる。

言葉の羅列が、どんどん短い文章になり、

『何故、愛子は俺と別れようとしたのか』

『俺が、間違っていたのか』

『愛子と直接会って話し合う方法がわからない』

悲痛になっていく、木下の心の叫びが、それを読む島田と田中の胸に突き刺さっていく。

そして最後、メモの終わりに、やはり小さな字で、それぞれが、自殺の原因なのだと、二人が思わずにいられない言葉が、綴られていた。

『もうひとり、俺がいる。』

『そいつが俺の幸せを奪っていく』

6・週末（後書き）

帰りたい、でも、帰られない。

無限ループに迷い込んだような、でも、なんだか違う。

そういう話を書きたかったんです。

木下は、間違いなく、普通に生活していましたが、どこかで箍^{たが}が外れ、知らず知らずに異世界に迷い込んだような錯覚に陥ってしまいます。しかし、現実になんか起こりえるわけがありません。彼は、決して、異常世界に迷い込んでいたのではなかったのです。

であれば、一体何が、彼を苦しめ、追い詰めたのか。

彼が言う、「もう一人の自分」は存在したのか。

本当は、明確な答えが、そこにあるのですが、あえて本作では語りません。

正体の知れないものこそが恐怖。本当に怖いのは、自分自身。恐怖と感じ始めるか、気のせいで終わらせるのか。それは、被験者の性格如何でどんどん変わっていきます。

少なくとも、木下はその真面目で一本気な性格から、ありえない事態を恐怖と捉えてしまった、自分を自殺に追い込むまでに……。少しでも、これを読んでひんやりしていただけたら幸い。

20070817

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5205c/>

帰宅不可症候群

2009年3月24日10時37分発行